

東京 IPO 特別コラム

2020年8月18日 Vol.164

A I 関連銘柄の活躍に沸く8月 IPO 相場

コロナ禍で日本経済が戦後最悪の不況に突入しようとしている時に3月をボトムにこのところの株式相場は上昇基調を続けている。緊急事態宣言で経済活動がストップした日本の4-6月期の実質GDPは年率27.8%も大幅な減少となり、リーマンショック時の落ち込みを上回った。このところも感染拡大傾向が続いていることから7-9月期も回復が緩慢となる恐れも指摘されており、これまで堅調な推移を辿ってきた株式相場にも暗雲が立ち込めたように見られそうだが、こうした局面こそむしろ投資チャンスだと割り切って相場に臨もうとする個人投資家の皆さんも多いようだ。

令和2年もはや後半戦に突入し2か月近くが経過しようとしているが、7月はBranding Engineer (7352)、Speee (4499)、GMO フィナンシャルゲート (4051) など7銘柄がIPOを果たし、既に8月もモダリス (4883)、ティアンドエス (4055) が登場。銘柄ごとに人気の違いはあっても概ね堅調な初値形成、株価推移が見られる。とりわけ好需給の下で上場直後にもたついた銘柄も高値更新の動きが見出せるなど活況を呈していると言っても良いだろう。

とりわけ8月7日にマザーズに上場したティアンドエスが公開価格2800円に対して2.5倍の7010円で初値をつけた後、本日の高値17700円まで短期間で更に2.5倍となったのは驚きである。同社は大手企業及び半導体工場向けシステム開発・運用保守・インフラ構築事業を展開。半導体やソリューションといった3つのカテゴリーでビジネスを展開し今11月期の年商は24億円余り。経常利益は3億円を見込む。今後の急成長が期待される先進技術カテゴリーにおいてはとりわけAIに注力。つまりAI関連銘柄として上場後の人気が一気に高まってきた。これはこの後に続く20日にマザーズ上場予定のニューラルポケット (4056・公開価格900円) のIPOの前哨戦とも言える動きだ。ソフトバンクへの売上構成比が45%を占めるニューラルポケットの事業規模は今12月期で売上7.8億円、経常利益1.4億円。「AIエンジニアリングで未来の社会を形にする。」をミッションに掲げ、実社会でのAI技術の活用と産業化を目指す同社は文字通りAIエンジニアリング事業を単一事業として展開する企業で事業規模こそ小さいものの、AI関連銘柄としての人気が予想される。5年後の世界のスマートシティの市場規模は2.4兆ドルにもなると見られ、そうした拡大が見込まれる市場に同社の技術は活用可能と自らの成長性をアピール。ティアンドエスが公開価格の6.3倍まで上昇しているだけに同社もかなりの人気が想定されるのだが、やや過熱気味とはなっても致し方ないだろう。

コロナ禍を打破する革新的技術、テーマがAIにあるとすれば既存の上場企業も含めて今後もAI関連銘柄が継続的な人気を集めることは想像に難くない。ソフトバンクグループが既に打ち出しているAI群戦略などとともに今後のIPO相場がAI関連銘柄の登場で沸き上がることは十分に予想できる。

(東京IPOコラムニスト 松尾範久)